

車イスの金メダリスト 三枝仁子

七里ガ浜在住村山仁子(旧姓三枝)さんは、1970年(S45)年パラリンピックの前身「ストック・マンデビルゲームズ(国際身体障がい者オリンピック大会)」のロンドン大会「スラロームの部」で、金メダルを獲得した。



突然の不幸

1958年9月、高校1年生の仁子さんは突然歩くことができなくなりました。テニス部の合宿や試合で無理をしたのではと、治療のため東京国立第一病院に入院したが、神経系統が侵され両足の自由が全く利かないまま1年後に退院し、その後6年間自宅で寝たきりの生活を送った。

障がい者スポーツとの出会い

1965年「これではいけない」と仁子さんは「国立箱根療養所」へ入所する。日中戦争で脊椎損傷兵を収容した「傷痍軍人箱根療養所」を前身とする箱根療養所は、当時としては珍しくリハビリにスポーツを取り入れていた。

1964(S39)年 開催の東京オリンピック・パラリンピックには、箱根療養所から男性 18 人女性 1 人が代表選手として出場し、日本のメダル 10 個のうち 7 個を獲得、アーチェリー競技団体では銀メダルを取る活躍だった。所内では車イスに座ってアーチェリーを練習する大勢の姿があり、仁子さんはスポーツ



アーチェリーを練習する仁子さん

が得意だったので、やってみ
たいという気持ちが強くなり、練習所で弓を引く姿が毎日見られるようになった。

健常者とともに参加した県のアーチェリー大会では、2 位入賞の成績をあげた。

1968、69 年の「神奈川県身

障害者スポーツ大会」では、出場種目の全てで 1 位を獲得し、パラリンピック出場の道を開いた。当時全日本大会は無く、各県大会での成績優秀者から女子 2 人、男子 4 人が日本の代表として選出された。

パラリンピックの歴史

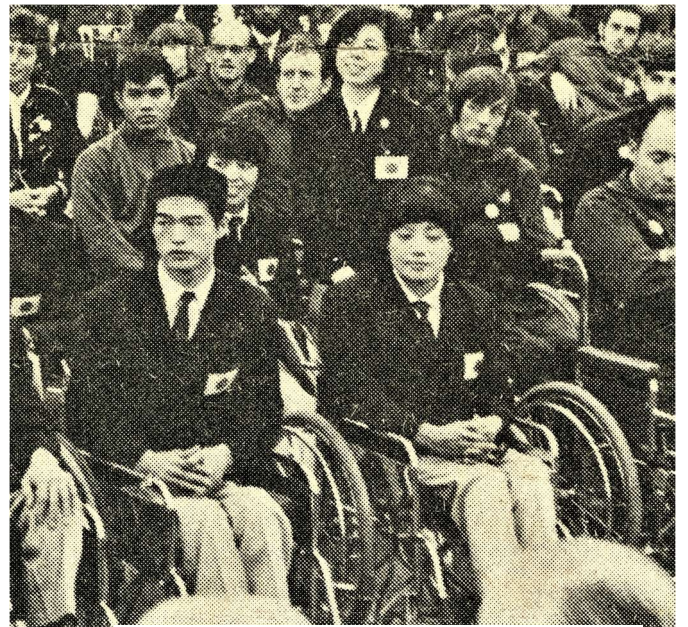
現在行われているパラリンピックは、ロンドン郊外の「ストーク・マンデビル病院」から始まる。第二次世界大戦で脊髄を損傷した軍人のリハビリにスポーツを取り入れ、「ストーク・

マンデビル競技大会」を開催していた。

1960(S35)年 オリンピックローマ大会開会式当日に開催された「第 9 回国際ストーク・マンデビル競技大会」が、「第 1 回パラリンピック」と称された。第 2 回が 1964 年の東京大会である。しかしその後、現在のようにオリンピック・パラリンピック同時開催は定着しなかった。

パラリンピック出場

1970 年 7 月 19 日～24 日開催のロンドン大会には、50 ケ国 420 人の車イス選手が参加した。仁子さんは「アーチェリー・60M ダッシュ・槍正確投げ・スラローム」の 4 種目に出場した。車イスの前輪を上げそのまま紅白の筒の間をくぐり抜ける「スラローム競技」では自主練習の成果を発揮し金メダルを獲得した。



宿舎はベッドとベッドの間が、車イスが 1 台通れるくらいの狭

さで、カーテンの仕切りも無い場所にベッドが 100 台位並び、トイレは上から垂れ下がった紐にぶら下がって移動する状況で、ヨーロッパでもバリアフリーとは程遠い現状だった。

この大会には、オリンピックローマ大会・東京大会のマラソン

ロンドン大会に参加する仁子さん

ン金メダリスト、アベベ・ビキラさんが、エチオピア選手団の総監督として参加していた。当時アベベさんは、自動車事故



ロンドン大会で 前列右仁子さん、右から2人目アベベさん

思い出になった。当時国際大会出場は一度だけの決まりだったので、ロンドン大会が最初で最後の大会となった。

手が動くことが一番幸せ

大会後、身体障がい者が働く平塚の「パラブライト社」に就職した。女性社員は1人、事務や寮の食事作りも担当した。

1973年 職場結婚後退職、書道師範の免許を生かし腰越と平塚で書道教室を開き、夫が独立して写植の会社を始めると夫の引退まで共に働いた。仁子さんの運転で妹達と旅行も楽しんだ。

「家事、炊事、身の回り、第二関節は使いすぎて腫れてしまったけど、手が動き自分で出来るのは平凡とは思えずありがたい」と話す。「挑戦する姿勢」こそが金メダリストの原点と感じた。

により車イス生活を送っていた。

帰国後出場メンバーと東宮御所を訪問、美智子妃殿下が名前を呼んで話かけてくれた事も良い